

「求めるべきもの」
列王記上 3 章 4-15 節

今日の箇所では、ギブオンでソロモンが礼拝をしたことが記されています。その時、ソロモンは、1000 頭もの焼き尽くす献げ物をささげています。いったいどれだけの時間がかかるのでしょうか。ただ 1000 頭持ってきて、それで終わりではありません。奉納者は献げ物を屠り、皮をはいたり、献げ物をささげるために、その一つ一つのことを神さまの方に心を向けて丁寧に行うのです。それをソロモンは 1000 頭行ったのです。果たして一日で終わるのでしょうか。つまり、それだけの長い時間、ソロモンは礼拝をささげ続けたのです。

そんな日を過ごして、くたくたになって眠りについた夜、神さまが夢でソロモンに現れて、言われました。「何事でも願うがよい。あなたに与えよう」と。その問いかけに対してソロモンはこう答え始めます。「あなたの僕、わたしの父ダビデは忠実に、憐れみ深く正しい心をもって御前を歩んだので、あなたは父に豊かな慈しみをお示しになりました。またあなたはその豊かな慈しみを絶やすことなくお示しになって、今日、その王座につく子を父に与えられました」と。

ソロモンは、自分の願いを言う前にまず父ダビデの話を神さまにします。ここで言われていることは、父ダビデの信仰と、神さまがダビデに与えた恵みの一環として、自分は王座につけられているということです。自分の努力や実力で王になったのではない、神さまが父ダビデの信仰に対して与えた恵みによって自分は王とされた。これがソロモンの信仰です。

そのソロモンは神さまから「何でも願っていいよ」と言われて、こう願います。「どうか、あなたの民を正しく裁き、善と悪を判断することができるように、この僕に聞き分ける心をお与えください。そうでなければ、この数多いあなたの民を裁くことが、誰にできましょう」。ソロモンは、任された王としての働きを父ダビデのように行いたい、そのために彼が求めたのは、民を正しく導けるようにという聞き分ける心だったのです。彼は、任された職務を信仰と責任を持って果たしていきたい、それができるように神さまに願っているのです。

そのソロモンの願いを神さまは喜ばれました。このところを「この願い事は主の御心になかった」(新改訳)と訳している聖書もあります。神さまは、御心になかった祈りには、その通り応えてくださいます。いや、それ以上のものをもって応えてくださる。ソロモンの願いと神さまの願いは一致していました。もし、ソロモンが民を支配する力が欲しいなんて願っていたら、おそらくそれは聞かれなかったことでしょう。しばしば私たち、神さまに祈ったってどうせ叶わないじゃんって思うってしまうことも多々あります。でも、もう一度、よく考えてみたいと思うのです。それは御心になう祈りなのかということ。

では、ソロモンの祈りに応えて神さまは何を与えられるのでしょうか。「あなたは自分のために長寿を求めず、富を求めず、また敵の命も求めることなく、訴えを正しく聞き分ける知恵を求めた。見よ、わたしはあなたの言葉に従って、今あなたに知恵に満ちた賢明な心を与える。あなたの先にも後にもあなたに並ぶ者はいない」。

この時、ソロモンは聞き分ける心を与えてください、と願いました。それに対して、神さまは「知恵に満ちた聡明な心」を与えられています。これは、どっちも似ているようにも思えますが、明らかな違いもあります。ソロモンが願ったものは、御心を聞き分ける心でした。その前提には、裁きは神にゆだねるという思いがあります。しかし、神さまは知恵に満ちた聡明な心を与えられた。つまり、知恵の部分、神の裁きをもソロモンに任せたのです。あなたなら神の御心の通りに裁きを行える。神さまはソロモンを信じ、ソロモンに期待したのです。

また、神さまが与えたものはそれだけではありません。「わたしはまた、あなたの求めなかったもの、富と栄光も与える。生涯にわたってあなたと肩を並べうる王は一人もいない。もしあなたが父ダビデの歩んだように、わたしの掟と戒めを守って、わたしの道を歩むなら、あなたに長寿をも恵もう。」と、もう大盤振る舞いです。ソロモンはこれだけ神さまから愛されていたのです。

私たちの神さまというのは、こんな方なのです。遠いお空でふんぞり返っている神ではないのです。私たちがいつ悪いことをするか目を光らせている監視者のような神でもないのです。私たちの神さまは、それこそ大好きな子に何でもあげたくなっちゃうような気のいいおっちゃんなのです。そして、このような神さまが私たちと共にいてくれるからこそ、私たちは隣人のために祈ることができます。奉仕することができるのです。なぜなら、イエスさまが、「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」(マタイ 6:33)と言われたように、私たちは、もはや自分のためにあれやこれやと求める必要はないからです。自分のことで心を騒がす必要もなくなるからです。だから、私たちは、人に心を配ることができる。人に仕えることができる。そして、私たちは何のために生きるのか、どのように生きるのか、自分自身が神さまと隣人とのためにどう用いられるのか、そのことを考えていくことができるのです。

今の世の中、本当に多くのところで人々のうめきが聞こえてきます。その声に対して、私たちは、共に生きる者でありたい、神さまにとりなしを祈り、人に仕える者でありたいと願っています。そのために私たちは何を為すべきなのか、主に何を祈り、何を求めるのか、そのことをこのソロモンの祈りを心に留めつつ、本当に求めるべきものを祈り求める歩みを進めてまいりたいと願います。